

さよならに

乾杯

森瑤子





さよならに乾杯

森瑤子

森 瑤子（もり・ようこ）

一九四〇年、静岡生れ。

六歳の時よりヴァイオリンを習い、一九六二年、東京芸術大学器楽科卒業。

アイバン・ブラッキン氏と結婚、三女の母。

一九七八年『情事』ですばる文学賞受賞。

著書に『情事』『誘惑』『嫉妬』『熱い風』『いずれも集英社』『別れの子感』（PHP研究所）などがある。

さよならに乾杯

昭和五十八年二月三日 第一刷発行

著 者 森 瑤子

発行者 江口克彦

発行所 PHP 研究所

京都市南区西九条北ノ内町一一 郵便番号六〇一一

電話 〇七五一六八一―四四三二

東京事務所 〇三―二九五―九二二一

印刷所
製本所 大日本印刷株式会社

© Yoko Mori 1983 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えさせていただきます。

さよならに乾杯

目次

1

風	9
海	21
旅が終つて始まる旅	31
台風の翌朝	44
抱きしめる	49
僕の方から電話するよ	63
恋に身を灼く男の話	77
女のためいき	92
贅沢な贈りもの	97

2

揺り椅子の日々 103

女たちのお喋りから 118

女たちの長い夜 130

終電車 144

三十三歳の痛み 150

決断するといふこと 154

ためらう時 157

3

失恋日記

173

青春譜

183

悔恨のモーツァルト

198

アポロに恋して

203

手紙

206

あとがき

213

さよならに乾杯

風

今年になって、なぜか秋風が身にしみる。その透明さが、冷たさが、文字どおり私の肉体をしんとひやして吹き過ぎる。

十代の終りには、その風はロマンと感傷だけを孕んでいたで、わけもなく涙ぐんだりした。涙で輪郭の滲んだ黄昏刻の風景が、このうえもなく綺麗だった。

二十代から三十代の中頃にかけては、微妙に色褪せてはきたが、似たような蒼い風が吹きこんで、私の胸を感傷で膨らませた。

そして、風が変った。

今年と、昨年の秋に吹いた風とは、確かに違う。色が、匂いが、透明度が、膚触りが、明白と異なる。老いへの予感から、死に至るまでの一本の曲りくねった道のようなもの

が、仄見えるような気がする。

束の間、私はうろたえて、一体自分に何が起こってしまったのだろうか、と考える。一年の間に何かが起つて、そして風が變つてしまったのだろうか。

けれども、何も起りはしなかった。風は毎年くりかえし吹く同じ秋の風なのだ。

それでは、何かを失ってしまったのだろうか。

そう自問する以前に、答が透けて見えていた。だから慎重にその問いかけを避けていたのだ。それと気づくかなり前から、漠然と、ある種の喪失感に怯えてはいなかったろうか？ 自分の胸にぼっかりと口をあげた欠落の感覚。それを覗きこむ勇気がなくて、無意識にであれ、その深淵の暗闇から、眼を背けてきたのではないだろうか？

私が失ったのは、一口で言えば若さだ。フィジカルな意味でも、メンタルな意味でも

——若さ。

思えば、それを私は突然に失ったような気がする。鱗が剥がれるように、年ごとに少しずつ若さが私から剝落していったのではなく、ある時、青天の霹靂のごとく、それが私から去っていった。主として、私の心から。

若さとは何かと言うと、それは私にとって、激しく執着する思い、である。

多くの場合、男への、傾斜、激しい思い入れであった。

十代、二十代、三十代を通して、たえず誰かが胸の中に住み続け、私を嘯^{せう}けてきた。

仄々とした恋心であったり、猛々しい愛情であったり、單なる情欲、欲望の充足に過ぎなかったものを含めて、心の住人たちはさまざまに変わり、入ってきてはやがて立ち去っていった。

たえず誰かに対して思いを燃やしてきたが、時には疲労困憊して、何もかもが厭になり、男^{ひと}の声、その温^ぬもり、匂いなどに嘔吐すると、眼には見えない甲羅で武装してその中にたてこもり、ひたすら書物を読んで過した。そんな時ですら、小説の主人公たちの幾人かに猛烈に熱を上げ、結局、心は一時も安まることは、なかった。古くは、レッド・バトラーから、つい少し前では、小説の登場人物より、それを書いた作者の方に興味が移り、たとえば、ウィリアム・ゴールディングについて言えば、尊敬と愛情と友情の全てを捧げても捧げ尽せないような、歯痒い感情に苦しめられたりもした。

ナルシズムと、自虐趣味と、それに情欲というやつかいな問題が絡んで、私の人間関係は、決して自慢できるようなものではなかったし、あらゆる種類の情——愛情、恋情、欲情、憐憫、嫉妬、悲哀、歡喜、絶望などの情 etc——というものが存在したが、ひとつ、友情だけが不在であった。

男たちとの友情は、激しい葛藤の真只中では、生れない。それはずっと後に、男と女の

關係が戰場となり、それをくぐりぬけ、ひとりひとりの孤独に戻った時、それでもなお双方の胸に居残り続ける相手への愛情——嫉妬と所有欲を含まない——を、友情と呼ぶのではないだろうか。少なくとも、私の場合はそうだ。

けれども、友情に手を差し延べている時間はなかった。ひとつの出逢いと別れの後には、不思議なほど、すぐに次の運命的な出逢いが待っていたから。

それがふと気がついて、周囲を眺めてみると、このところ周辺には友だちと名のつく人間關係が目立つのである。

「ボクたちは、友だちだよ」と、確信をこめた暖かい声でそう言われて、
「ええ、そうね。もちろんよ」と答えながらも、どうしてか内心の寂しさが拭えない。

冬の日溜りのような、あるいは温^ぬま湯のような、その中でぬくぬくと手足をのばして寛げる、そうした關係、あるいは環境は、ま新しくあった。にもかかわらず、常に背中の毛を逆立てていた状態——緊張とストレスの連続の日々が、遠のきつつあることを識^しって、寂寥^{せう}のあまり、茫然としてしまうのだ。友情というものは、決して私を傷つけないのだ、と呟^{ささや}いても、それでも私はまだ、傷つくことが好きなのだ、と、声にならない悲鳴のようなものが、胸の内で上がる。傷つくこと、他人の存在ひとつで、私の喜怒哀楽がいとも簡単に左右され、そんな自分がひたすら哀しくて——。それに別れの苦しみ。それは沈黙の苦

しみだった。

“なぜなの、なぜ行ってしまうの？”

あるいは、

“私を見捨てないで！”

と、言ったり叫んだりできたら。髪ふり乱し、狂態を演じ醜態をぐりぬけてきていたら。

自尊心ゆえにそのように自分を燃焼しつくすことは決してなかったから、別れは沈黙に閉ざされて、鬱々と辛かった。それでも、あの日々を取り戻したいと切実に望む思いを拒めない。私はまだ、冬の日溜りにとろとろと身を置くより、皮膚をこがし魂を引き裂かれるような日々の方に未練がある。

つまり、これこそ若さへの抑えがたい執着ではないだろうか？

私の上に、温かい眼差しを注ぎながら、友情を約束する相手に向って、

「ありがとう」と、私は呟くが、ほとんど上の空だ。

なぜなら、かつてその眼差しは欲望に燃えて私の心を溶かしたのだから。あるいは時に、嫉妬のあまり暗い情念のナイフのような視線で、私の良心を切りつけたのだから。

その同じ瞳が、寛大な光を湛えて、穏やかに私を見守っているのだった。もう決して、

私を激しく責めもしなければ、途方にくれて私の上からふいに逸れていたり、恥じて臉を伏せたりもしないだろう、その眼差しが。

私は感謝したい気持で一杯だったが、やはり一抹の寂しさが残り続けた。

今年になって、秋風の冷たさが、私の軀をひやしたのは、きっと、そのせいなのだろう。

心の中に誰かが住みついて、恋へと私を誘っていたから、十代の、二十代のそしてわずかに三十代前半の秋に吹いた風たちは、私を涙ぐませたのだ。

風が変ったと感じるのは、私の心に激しく執着する思いが、忽然と消えてしまったためなのだった。

それはこの夏、シンガポールのホテルで、まず、起った。

赤道直下のその都市には、私のかつて知らない風が吹いていた。全く異種の——熱風だった。

それは馨しい南国の花々や、熱帯樹木や、水、太陽、潮そして夥しい屋台の雑踏と、不思議な香辛料などの匂いを、複雑にまき散らしながら、吹いていた。